

郷土室だより

第9号

昭和50年6月15日 初刷

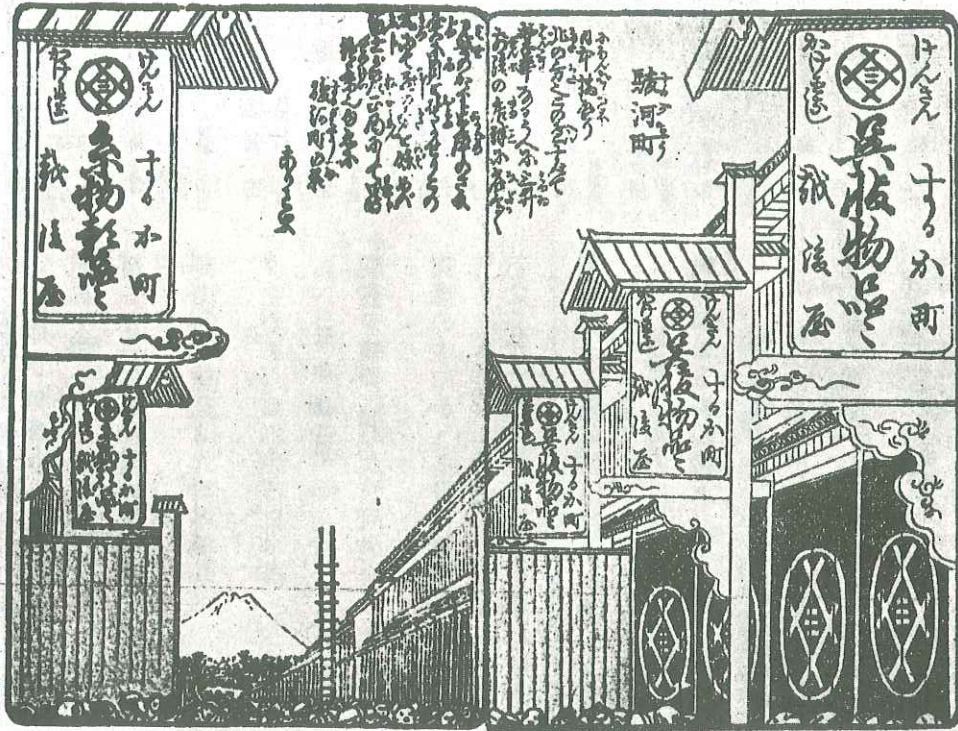
平成7年3月31日 2刷(500)

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 3543-9025



駿河町

広重画 絵本江戸土産

中央区名所句集 一

安藤菊二輯

山王祭

ねり母衣ほろや甲かぶとの渡し鎧が嶋

蝶々子
(詳説当世男)

山王の氏子として

我等迄天下祭や土ぐるま

其角
(五元集)

番附をうるも祭のさほひ哉

同

山王社は、千代田区永田町二丁目に鎮座する。明治二年、日枝神社と改号。文明十一年(一四八六)大田道灌が川越仙波から勧請するところと伝え、徳川氏も産土神として、厚い崇敬を寄せた。祭日は六月十五日。山王の氏子は、南は芝を限り、北は神田にいたる。町数百六十個町を数え、四十五番の山車が出て、氏子の町々を巡行した。地域をあげての祭だったのである。

日本橋

よろひが嶋にさそふ秋風
日本橋一本鎧に霧はれて

政陳
(詳説当世男)

日本橋より年のあけぼの

駄賃付さだめの通り雪消て

安昌 (同上)

漸越ゆる土手の松山

信章

日本橋ちんば馬にて踏ならし

桃青 (芭蕉)

方々見せうぞ佐野の源助章 (奉納二百韻)

江戸の春うつかりもしれ日本橋 善古 (俳諧江戸通り町)

日本橋富士のうそつき八重霞

ト見 (江戸広小路)

日本橋や渡りくらべて年の暮

蝶々子 (俳諧当世男)

此雪に大晦日の来るらん

其角

日本橋を日本の月 轍士 (七車集)

口切のまたぐおもひや日本橋

氷花 (社撰集)

引付や日本橋角ゑびす紙

延齒 (鳥山彦)

前店の春めかしさよ日本橋

作者不覚

さし荷ひにて沙糖売声 其角 (鳥山彦)

万歳やはるばる来ぬる日本橋

寥和

海棠やかたげて通る日本ばし

大江丸 (俳諧傳)

霞ませも果てず江戸橋日本橋

同

後の名の月の光りや日本橋

也有 (蝶つか)

江戸に入日本橋を渡る

いつもながら雪は降りけりふ二の山 鬼貫 (天居士集)

元日や旅人通る日本橋 湖十 荏亭 (句集)

訝してみじか夜明ぬ日本橋 素丸 (宛句集)

馬で行年見送らん日本橋 蓼太

夕立やあらはれ渡る日本橋 日本橋辺

日本橋辺

朝霧や歌舞伎の太鼓河岸のこゑ 莊丹 (龍静集)

夷講の中にかゝるや日本橋 菊阿 (正風彦根集)

目に花にわたる世広し日本橋 菊舎尼 (手折菊)

日本橋から夜の明てはなの雲 完来 (空華集)

遠浦の魚舟橋下に入る

帆をかぶる鯛の騒ぎや薫る風 其角

孟宗が艱苦は唐の不自由、我国の 歛染は居ながら孝養を自在す

雪の日や荷買に日本橋 金羅

日本橋は中央区の名橋であるばかりでなく、日本の代表的名橋の一つである。 慶長八年(一六三〇)の創架で、架橋の翌年には

五街道の起点に定められた。

橋上に立って西方に瞳を放てば、緑樹色濃き江戸城の壮大な景観が横たわり、遥かに遠い秩父丹沢山塊のかたに、白雪を戴いた霊峯富士が浮かんで見える。

広重は、日本橋に取材した十点を越す版面を残したが、俳書の中からも多くの佳句を拾い出すことができる。

室町

野風吹室町かしら初しぐれ 鉄信 (純明島)

室町は、昔は日本橋を渡って、大通りを北へ進む通り添いに一・二・三丁目と続く幅狭い町であったが、現在は日本橋の西北、三越側を幅を広げて一・二・三・四丁目と呼ぶように改められた。

室町の名は、京都の室町をとったともいうが、その由来を詳かにしない。

尼店塗物屋

見世椀をことくたくく水鶏かな 立几 (江戸名物興子)

昔日、室町一丁目の地は、尼崎利右衛門(又右衛門とする書もある)の拜領地だったので、町地化して後、尼崎町と称し、角地を俗に尼店と称した。『武江図説』に、「此側家並塗物なり。此軒下にて馬具荒物等を商ふ。前店穴蔵等家前門々に片側並ありしが、近き頃迄に追々相止みぬ」とある。

駿河町

夕月や富士見ゆるかと駿河町 素 竜
駿河町本町ながき残暑かな 素 丸
(素丸宛句集)

夕月や明州思ふ駿河町 沙 竹
(梨園)

駿河町は、ほとんど全部を越後屋(三越の前称)が占めていた。町名の由来は明らかでないが、三越と三井銀行との間から、遙か真向いに富士を望むことができた。その好望あるがためにつけられたといわれる。

(越後屋)

越後屋に絹さく音や更衣 其 角
越後屋の算盤すぎて小夜衛^{ちやゑ} 其 角

駿河町越後屋

夏とても雪の甲斐がね向ふ店 幾 邦
(江戸名物菓子)

押あふて人に春たつ年のうち 七 楼
越後屋の燈の綾よにしきよ 祇 川
(七拍集)

越後屋の開祖三井八郎右衛門は、伊勢国安濃郡一色の人、族戚三郎右衛門に伴われて江戸へ下り、いったん帰国したが、延宝元年(一六七三)再出府、本町一丁目にも呉服店を開き、天和三年に駿河町に移った。

当時、呉服屋仲間が懸売りを主とし、資金繰りに苦慮しているのを見て「現金懸値なし」の新商法を打出し、布地の切売を断行するなど次第に人気を博し、元禄の頃にはすでに江戸一番の大商店にのし上っていた。デパート三越が越後屋の後身であることは説くまでもない。

(一石橋)

一石橋年うちこさん玉あられ 流 也
(江戸広小路)

一石橋は、常盤橋の南、外濠通りの西河岸と品川町裏河岸とを結ぶ橋で、橋北に幕府御用商人の金座の後藤家、橋南に同御用商人の呉服所の後藤家がある所から、後藤(五斗)と後藤(五斗)を合せて、一石と洒落た名がつけられた。一名を八見橋ともいう。

(本町)

よい月と本町の声揃ふ也 新 真
(蕉尾琴)

萩 蝶々子と近づきになりて後に

本町の風義やかたる萩の声 雪 前
(誰語当世男)

本町呉服店

本朝に唐ラけいとうも地合から 青 隆

本町綿屋

時しらぬ山敷本町蚕店 亘 徳

本町色紙豆腐

本町は同じ御壁の月に問へ 標 梅

本町益田目薬 (註1)

三春の益りあり香あり五霊香 止 水

岡田忠助 (註2)

本町の角へはよけよ大根馬 滄 洲

本町長崎屋勸次 (註3)

白雨に兼て騒がぬ軍者者 秦 郷
(以上六首「江戸名物菓子」)

本町は江戸城下町町割の時、第一に着手された所で、大伝馬町・横山町を経て、浅草橋にいたる街路を本町通りといった。

寛永六・七年の頃、京都から下った呉服商人山城太郎次が、常盤橋詰の往還に竹馬床をしつらえ、大名旗本の供士相手に呉服物を買ったのが皮切りで、後には竹馬床の市が立つほどの賑いとなり、あまりかしましいので場所の立退きを命ぜられ、本町一・二丁目店を持つにいたり、貞享頃には、富山屋・伊豆蔵屋を初めとして呉服物商が軒を並べるようになった。『事蹟合考』に「彼者(太郎次)本町に売店を出してより日を追ひ月を重て、京大坂より呉服物商人本町につどひ集りて、今世のごときの數百家とはなれり。」といている。

○註1 益田氏は本町四丁目に家居し、五霊香という目薬を売っていた。その先祖は相州小田原の人。江戸開府の頃出府し、目薬を売って家を興した。『参考落穂集』に、本町四丁目南側に、同姓益田氏、

三軒、ともに五靈膏を売って業とするが、享保の頃か、西角の益田氏は断絶したと記してある。

○註2 岡田忠助は地黄丸を売る薬屋で『江戸総鹿子新增大全』に「地黄丸、本町壱丁目、岡田忠助」と見えている。

○註3 長崎屋勘次は、懷中に納まる折たたみ式の合羽かっぱを売っていた名代の店。

○『江戸名物鹿子』三冊。豊嶋治左衛門、同弥右衛門撰。享保一八年出版。木村捨三氏に『註解江戸名物鹿子』がある。昭和三十四年、近世風俗研究会刊以下「鹿子」と略称する。

両替町金銀

針口の音に雲井の時鳥

柴 荷
(鹿子)

両替町は、現在日本銀行のある所の旧町名。後、京橋に新両替町ができたので、ここを本両替町とい

った。
昔時、金銀の銭との交換(両替)は、駿河町と本両替町に限られていたので、江戸府内外の両替屋は皆ここに集って両替をした。幕府は、明暦元年十二月、両替屋銭売の制度を定め、享保六年に業者を六百人に限定したが、天明七年さらに六百四十三人と改めて、新規の開業を禁じた。

十間店雑市

人に酔ん十間店の売ひいな

周 角
(鹿子)

十間店(十軒店とも書く。)は本銀町と本石町に

はさまれていた所で、寛永江戸図に「十間たな」とあるから古い称呼である。小区画の町であったから今は室町三丁目内に吸収されて古い町名は亡んだ。

三月上旬の節句に、美々しい雛人形を飾る風習が大名家、公家、町家に普及するようになってからであるか、ここ十軒店では街路に仮小屋を建て、二月二十五日から三月二日まで短期に雛人形市が立つようになり、人出に賑うのであった。四月二十五日から五月四日まで、胃人形、菖蒲刀、幟などの市立つことも三月の雑市と同様だった。

江戸の諸問屋が幕府から公認された文化十年当時の『十組問屋便覧』には、十軒店の店として、扇問屋・岩戸屋源兵衛、同・丸屋伝兵衛、糸問屋で麻守問屋を兼ねた久野屋善助の名が見える。この頃には書肆万笈堂もこの町で盛業を営んでいた。

嘉永四年の『諸問屋名前帳』雑問屋の部では「本石町二丁目家持唐木屋七兵衛」の名を見るのみである。
十軒店が軒並雛人形屋に変わるのには、節季の三月と五月を目当にして短期間だけのことであった。町の商店の大部分が、平素は似よりの他商売をしていたことを忘れないでほしい。

鉄砲町名酒

紅毛が枕の鐘やわたり酒

香 国
(鹿子)

鉄砲町は、現在は本町三丁目と四丁目に編入されて、旧名は亡んだ。

幕府の鉄砲師てっぽうし厩宗八郎の受領地だったのでこの名

があり「寛永江戸図」にも「てっほう丁」と記してある。句題の名酒というのは、同丁居住の岡本和泉所製の白酒をいう。

阿蘭陀宿

紅毛やをのが巢となる長崎屋

寿 尺
(鹿子)

長崎屋源左衛門家に、紅毛来貢の品々奇なりとして

桐の花新渡の鸚鵡不言

其 角
(五言集)

阿蘭陀宿というのは、江戸時代に参府のオランダ商館長一行の宿泊する定宿で、本石町三丁目の北東角地にあった。長崎屋のことは、季刊「日本橋」第三号に寄せられた岡村千曳氏の「長崎屋と和蘭陀貢使」に詳しい記述がある。

この長崎屋と裏通りを隔てて、石町の鐘撞堂があり、川柳に「石町の鐘は長崎まで聞え」などというおもしろい句があったりする。

催し物のお知らせ

◆東京を語る会 第15回

日時 六月二十八日(土)午後二時〜四時

講演 江戸のおまつり

―江戸・東京の山車のはなし―

講師 地方史研究協議会員 鈴木 理生 氏

出席をお待ちします。入場は無料です。